

ダンジョンにユージオがいることは間違っているだろうか？

Seiya4414

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【黒竜】の討伐失敗。

【ゼウス・ファミリア】の壊滅。

子供を多く失った神に拾われた、赤ん坊、迷宮都市から遠く離れて、田舎の村での生活を送ることになった神に普通の子供として育てられていった、ユージオ。

それは何処にでもいる英雄になることを願っている。普通の村人になるはずだった。

これは、アンダーワールドに産まれる筈だった人物が、ダンまちに産まれて、そこで英雄になることを願い、そして、その願いが叶った

『英雄物語』である。

主人公は最初は弱いですが、

徐々に強くなります。

基本的に原作に沿って話が進みますが、

所々オリジナル展開が入ります。

駄文ですが、暖かい目で見てください。

目次

第1章 始まり

1話	英雄とは	1
2話	青薔薇の剣との出会い	7
3話	特訓 そしてオラリオ	15
2章	氷の冒険者	
4話	ファミリア 入団	21
5話	初めてのギルド	26
6話	猛牛遭遇	31
7話	レアスキル	39
8話	豊嬢の女主人	45

第1章 始まり

1話 英雄とは

今回から新しいシリーズを始めます。

これは頑張って投稿していきたいと思います。

この物語は多分、ベル君はでてきません。

そして駄文です。

それでも大丈夫だよ。という人はご覧下さい。

今回も、誤字やおかしな点がありましたら、

ご指摘下さい。編集します。

それではどうぞ。

第1章 始まり

第1話 英雄とは

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

おじいちゃんに数々の英雄譚を語られて、

いつしか僕は冒険者に憧れた。

手に持つ剣1本でのし上がり、

モンスターに襲われる美少女と出会い、

間一髪の所に飛び込み、格好良く助け、

仲間兼恋人のような関係になり、

共に助け合ったりしながら、冒険者したい。

それから・・・それからっ!!

子供から少し成長して、英雄の冒険譚ぼうげんたん

に憧れる男が考えそうなこと。

可愛い女の子と仲良くしたい。

綺麗な他種族の女性と交流したい。

少し邪^{よこし}までいかにも青臭い考えを抱くのは、
やっぱり、若い雄^{おす}なりの、
性^{さが}じゃないだろうか。

ダンジョンに出会いを…訂正。

ダンジョンにハーレムを求めるのは間違っているだろうか？

そんなことを考えていると、ひとつの結論が出てきた。

やっぱり間違っているっ！

そんな憧憬を持つ亜麻色髪に緑の瞳の少年は今。

『ギシャアアアアっ！』

「ほおあああああああああああ!?!」

自分が住んでいる村近くの森を

全力で逃げ回っていた…

醜く邪悪な小人として有名な、

ゴブリン達に追いかけられている。

冒険者ではなく『神の恩恵ファルナ』がない少年には

本当に、絶望的な状況である。

ああ、やっぱりゴブリンにも恐れる僕が…

英雄になりたいと願うのは間違っていたのだろうか。

ゴブリンの持つ棍棒がとうとう少年の腹部を捉え、

力任せに振られた方向へ体は吹き飛び、

体は後方の木へと打ち付けられてしまった。

少年は力を失い、地面に倒れ込んだ。

「ギシャアアアア…」

「ひっ…!?カハツっ…!!」

ゴブリン達はこれから殴り殺すことができる獲物を前に醜悪な顔
でニヤケ顔を浮かべる。

こんな状態では英雄譚に出てくる英雄になることはおろか可愛い女の子達にすら見せられない。

自分は哀れだな、と絶望的な状況の中、考えていた。そうしていたら、ゴブリンたちに囲まれていた。

(ああ…： 僕はここまでか…：。英雄になりたかったな…：)

頭の中で小さくそれを願った。

カチカチと歯を鳴らし、

ゴブリンの酷い吐息が僕の鼻に伝わる。

今にも僕の鼻が死にそうだ。

最後に嗅いだものが、これとかどうかしてるよ。

(結局…： 僕には英雄の資格がないんだな…：)

そう思いながら目を閉じて諦めた。

その後、ゴブリンの声が聞こえた。

しかし、痛みがなかった。

恐る恐る、目を開けてみると、そこには…

おじいちゃんがいた。

「おんりやああああああ!!」

『ギンシャアアア!?!』

僕は今、すごい光景を見ていた。

農具である鍬をまるで首を刈り取る大鎌のように構え、

振りかぶり、次々とゴブリンの首を切り裂いては

次の目標に目をつけ、倒していく。

ゴブリンの頭部は宙を舞っている。

胴体は吹き飛んでいる。

僕はその光景に圧倒された。

てか……。なんで、おじいちゃんここにいるの？
という疑問を思っていたら、

相手を数分で壊滅させた。おじいちゃんがそこにいた。

「大丈夫かつ！ユージオっ!!」

戦闘が終わってすぐに、僕の目の前にきた。

おじいちゃんが僕を心配するような目で、

こちらを、見詰めてくる。

大丈夫じゃない。

大丈夫な訳がない。

ゴブリンにすら倒せない自分が……

ゴブリンに恐怖を抱く自分が……

逃げ惑うことしかできなかつた自分が……

とても惨めでしょうがない。

確かに、年齢を言い訳にしたり、

僕はまだ、冒険者じゃないとか、

体が貧相とか、言い訳することは可能だろう。

しかし、そんなちっぽけなプライドを、

盾に意固地になっても、願ったりしていても、

自身の憧れの英雄には絶対になれっこない。

そう理解した亜麻色のふわふわの髪に緑の瞳の少年は、

ボロボロの状態で決心して、
自分を育ててくれた祖父にこう告げた。

「おじいちゃん…っ！僕は…強く…な…りたいです。」

あまりの激痛に、

そう言っつて、意識を手放した。

これが、小さきものが英雄に憧れ、
英雄になれるように願い、

そして叶った【英雄物語】である。

この時から歴史は動いた。

フローズ・ユージオ

Lv0

力 : 10

耐久 : 10

器用 : 10

敏速 : 10

魔力 : 10

ここまでご覧頂きありがとうございます！

これからも、更新頑張っていきたいと思えます。

この物語は、主人公（ユージオ）が、

アンダーワールドではなく、

ダンまちに生まれていたらという話です。

この話は、最初は主人公はあまり強くないです。

徐々に強くなります。

ほとんどは、原作通りにいきますが、オリジナル要素を、
ちよくちよく挟んでいきます。
駄文になるかもしれませんが、それはすみません。
ユージオ最高です。(聞いてない)

2話 青薔薇の剣との出会い

今回はユー・ジオが青薔薇の剣と出会います。
駄文です。それでも良いならご覧下さい！
今回も誤字やおかしな点がありましたら、
ご指摘下さい。編集します。
『』は青薔薇の剣です。

第1章 始まり

第2話 青薔薇の剣との出会い

『新たな我の使い手よ、目覚めよ』
「ううっ…」

『我は今、氷塊の洞窟に封印されている。』
『だから、封印を解除しに来てはくれないか?』
『勿論、君が望んでいるものが… 手に…』

「……………ん——?…ん?…」

亜麻色髪緑目の少年は目が覚めた。
なんだか、不思議な世界にいた気がする。

それから、過去どんな状況であったのかを
鮮明に思い出した。

「っ…！そうだ！僕は確か…っ!？」
ゴブリンと言おうとした瞬間、
激しい痛みに襲われた。
しかし、周囲にはゴブリン達はいなかった。
しかも、森のなかにさえ、いなかった。
いつの間にか僕は自分の部屋でねていたようだ。

おじいちゃんに助けられた後、

おじいちゃんが家まで運んでくれたのかな？

おじいちゃんに感謝しなきゃっ！

そう思っている自分の部屋から、

ドアの開く音が聞こえ、

慌てた様子の子の祖父が話しかけてきた。

「おおっ……！ユージオよ。気がついたか！」

今までで、一番心配そうな声を出しながら近寄ってきた。

それもそうだろう……。

モンスターに襲われたのだから。

気絶する前の戦っているおじいちゃんの、

威圧感が感じられない優しい雰囲気を感じた。

「おじいちゃんっ……。」

もしかしたら、死んでいたかも知れない。

もう、おじいちゃんと会えなかったかもしれない。

そのことを考えていると声も出なかった。

「もう大丈夫じゃ……。ユージオっ！」

おじいちゃんは優しく抱いてくれた。

僕は嬉しくて堪らなくて、気持ちが制御出来なかった。

「おじいちゃんって凄いね！」

カッコ良くゴブリンを倒せるなんて！！

さすがぼくのおじいちゃん！」

「ガツハツハツ、儂にかかれば朝飯前じゃよ！」

祖父はそう言った後に、

ガッツポーズをユージオの前でとる。

ユージオは自分の無力さと虚しさに落ち込んでいたが、

自分はそうだ。あの時決意したのだと。

頭を振って立ち上がる。

「おじいちゃん、僕を強くして下さい。」

おじいちゃんはこれ以上ないくらいの、
万遍の笑みでこう告げた。

「嫌じゃ——っ！」

僕は一瞬頭の中が真っ白になった。

どうして、僕のおじいちゃんは教えてくれないのか？

どうして、断られたのかと。

「どっ…！どうしてですかっ!？」

そう呟くことしかできなかった

ユージオを前にして祖父はニヤリと気味の悪い笑い方で、興奮しながら言った。

「何故ならっ！男の子に教えるより、女の子に教えた方がな、
キヤツキヤツウフフができるからじゃ——っ。」

僕は祖父の発言の意味が分からなかったので、

キヤツキヤツウフフと解釈した。

多分それはセクハラ発言だろう。

しかし、ユージオには、その発言を理解することが、出来ずに、強く反発した。

「そっ…：それでも強くなりたいたいだっ！おじいちゃんみたいに強く。そして、英雄譚に出てくる英雄になるために、強くなりたいたいだっ！」

それを聞いて、祖父は急に真剣な顔つきで話しかける。

「ユージオよ…：お前を連れていきたい場所があるのじゃが、ユージオの怪我が治ったら一緒にきてくれないかのか？」

今までに、見た事のないような、真剣な様子に僕は1度戸惑ったが、決心したんだと強く頷いた。そして、治療に専念した。

ゴブリンにやられた所の怪我は数日で治った。そして、ユージオは、祖父と村のはずれにある祠へ向かうことになった。

けもの道になっていたが、人が通れるように整備されていた。その道をどんどん進む。さすがに歩き疲れたユージオはこう言った。

「ねえ…？おじいちゃんどこまで行くの？」

そして、おじいちゃんは

「もうすぐ着くぞ。ユージオよ。」

そこには拓けた土地があった。

綺麗な滝が目の前にあり、

小鳥の囀りが良く聞こえ、

当たり一面に綺麗な薔薇が咲いていた。

そんな空間にポツンと祠が立っていた。

そして、その後ろの滝の裏に洞窟があった。

その中は当たり一面に凍っていた。

滑りやすいので、慎重に進んで行った。

洞窟の奥にはすぐに着いた。

そこにあっただのは…

謎の石がそこにはあった。

石の目の前までくるとその石には、

多くの文字が刻まれた石碑であることがわかった。

ただし、文字は神聖文字ヒエログリフで刻まれており、

ユージオには何が書かれていたのか、
まったくわからなかった。

そして石碑の前には、白く輝く1本の剣があった。
その空色の剣は敵を凍らせる為だけに
存在しているかのような圧を感じた。

生まれて初めて見るのに、

こいつが僕を呼んでいるように見えた。

「おじいちゃん……この場所は？」

「ここはな、ユージオ、冒険者の墓でもあるし、

この剣を封印した場所でもあるんじゃない。」

そう祖父は呟き、いつも優雅に笑ってばかりのおじいちゃんはとて
も、寂しそうな顔をしていた。

「ここは……儂の子供が眠っているんじゃない。英雄になりたいと願っ
ているユージオに一度みせたくての」

そう呟いた祖父の姿を見て、

ユージオはとて胸が苦しくなった。

「冒険者はいつ死んでもおかしくない危険な道を歩むことになるん
じゃぞ……。例え、誰よりも強くなっても、報われない時だつてあ
る……。それでも、ユージオは英雄になりたいのかい？」

そう言われて、何故ここに自分たちが来ているのかを
感情と愛情で理解した。

おじいちゃんは僕に死んでほしくなく、

僕自身の幸せを願っているのだと、

そんな、おじいちゃんの優しいを

子供の僕の思考でも理解できた。

なんでだろう……。

僕は今ここで伝えなければならぬと思った。
そんな感情が芽生えてしまった。

そうか……。僕はあの時決めたことを、もう一度言うんだ。

「それでもっ……。僕はっ……。英雄になりたいですっ！」
決心したことをもう一度言った瞬間に
意識が切れた。そして……

封印されていた剣がテレパシーで話しかけてきた。

『今の話を聞かせてもらった。君は僕のパートナーに相応しい。』

「貴方は誰ですか？」

『その剣と言ったら分かるかい？』

「あの綺麗な剣ですか？」

『そうだ。君は僕に相応しい力を、

そして精霊以上の魔力を持っているからな！

実に興味深いから君の物になるよ。』

「なるほど……。僕の剣になつてくれるの？」

『勿論だ。これからもよろしく頼むぞ。我が主よ』

「はいっ……！」

『じゃあ、そろそろお別れだ。』

外でおじいちゃんが発狂してるからな！』

「ええっ!?なんでっ!？」

『起きてみれば分かる。さらばだ、また会おう。』

そこで意識が現実に戻った。

おじいちゃんはいえぬ顔をして僕を見ていた。

何故なら、封印されていた剣を抜いてしまったからである

そして僕は万遍の笑みでおじいちゃんに言った。

「おじいちゃん… 僕はこの剣と一緒に強くなるっ！」

おじいちゃんは一瞬、啞然していたが、すぐに戻ってきて、こう言った。

「よっ、良からう！面白そうじゃからな！」

何故か知らないけど、ユージオの強い懸願ねがいが届いたのか、顔を伏せたあと、何かを決意して、

覚悟を決めた顔で自身の孫に告げた。

「わかった、ならユージオっ！お前を一流の冒険者にしてやろう」

それからは剣術の才能を開花させ、凄いスピードで成長した。

おじいちゃんからは、基礎の剣術を、

青薔薇の剣からは、夢の中で特訓し、

アインクラッド流をマスターした。

でも、その日から地獄の特訓が始まり、

ユージオは自分の浅はかな言葉に物凄く後悔した。

ここまでご覧頂きありがとうございます！

駄文ですみません。もっと上手く表現できるように小説更新と共に頑張っていこうと思います。

今回は青薔薇の剣と出会いました。

ユージオはアインクラッド流の、

片手剣のスキルを使えるようになりました。

後、青薔薇の剣が何故封印されていたのかは、

別の話で語ろうと思います。

おじいちゃん（ゼウス）とは次回でお別れです。

次回終了後 2章に突入します。お楽しみに！
ユーゾオ最高すぎる。(当たり前か)

3話 特訓 そしてオラリオ

今回は青薔薇の剣の過去と特訓内容
そして、オラリオに到着致します。
これが終わったら大体原作通りに行こうかなと
考えています。
駄文です。それでも大丈夫ならご覧下さい。
今回も誤字やおかしな点がありましたら
ご指摘下さい。編集します。
それではどうぞ！

第1章 始まり

第3話 特訓 そしてオラリオ

ここでは、青薔薇の剣のことを彼と呼ぼう。
これは、オラリオで起きた大量殺人事件だ。

この全員のほとんどが盗賊であつた。
しかも、全員は凍死したという事件だ。

『凍え死ね…クソどもがっ…!!』

「キャっ——!!」

『アイス氷雨暴風っ!!』

その場にいた全員は凍結状態になつた。
そして、放置された全員凍死した。

そして彼は復讐を果たし満足していた。

『やつと……俺は復讐を果たした……。』

妹を拉致して殺した糞どもを全員殺した。

しかし、復讐を果たしてもそこには何もなかった

自分の居場所を失った。

勿論、それだけならいいが、

そこに居た一般人さえも殺してしまった。

しかも、この時のオラリオは治安が悪かったため
盗賊も何故か一般人扱いをされた。

これにより、一般人を大量殺人した大罪人となり、国外追放を受けたあとに、二度このようなことがあつてはならないと言うことで、ゼウスファミアリアに封印された。

誰もが彼を嫌った。

彼は認められなかった。

というか、誰も彼に触らなかった。

それから長い年月がたった。

武器となった彼は今では歩くことも、話すことも出来ないが、食事を取らなくて良く、思つてた以上に楽だった。

しかし……あまりにも暇だったので、久しぶりに外の世界をたまたま見た所、自分を扱えるほどの人間がそこにいた。

彼は興味を持ち、少年を精神世界へと招いた。

そこで、少年と契約を結び今に至る。

この時に彼を封印したのにはゼウスが関わっていた。

だから、彼はゼウスを……許さ……

そこでユーージオは目が覚めた。

あれから7年もの月日が経った。

おじいちゃんと青薔薇の剣との特訓が始まって以来、僕の生活はこれまで以上に急変した。

特訓をしてくれたのはとても喜ばしいことで、”恩は返せなくなっ
てしまった”が今でもとても感謝をしている

しかし、余りにも特訓は辛すぎた。

まずは叔父の修行内容だ。

冒険者の基本たるスタミナと精神力の強化のために、モンスターが
生息している山奥で青薔薇の剣一本待たされて、1ヶ月ものサバイバ
ル生活をする事になったり。

筋力の強化のために、素振りを朝日が登ってから、日が暮れるまで
やるし。

脚力の強化のために、モンスターをおじいちゃんが蹴り飛ばして、
何故か僕が一日中終われる羽目になるし。

神フアラの恩愛ルナをナかけている冒険者ならまだしも、
神フアラの恩愛ルナを授かナっていない僕には、

特訓は発狂ものだった……

そして、青薔薇の剣との修行。

これは酷すぎる。

おじいちゃんとの特訓で疲れているのにも関わらず、
容赦なく精神世界で鍛えられるという悪夢でしかなかった。

剣術の場合は、異世界？の技で覚えるのに苦労した。

魔法の場合は、なんと氷属性ならなんでも使えるらしい。

だから、永遠と異なる魔法を詠唱しまくってた。

そんなこととしてなら、大体は無詠唱で、魔法を発動できるようになった。

この頃は、良い夢は一度も見た事がないくらい。

毎日のように、スキルを身につけ、学んだ。

そんな滅茶苦茶な訓練をしてきた僕は今、

明日村をでるつもりです。冒険者になるために。

翌日：：：しっかりと朝食を食べ、顔を洗い歯を磨く。日課となった
適度な準備運動と剣術の稽古をしたのち、家の扉を開けて村の出口へ
と走る。

「おっ！、ユージオ来たか!!」

「レルバおじさん、おはようございます。」

「おう、礼儀正しいなっ。やっぱり真面目だな：。」

「どっかのジジイと違ってなっ！」

「誰か礼儀正しくないんじゃないんじゃ：：？」

「アハハハ：：：」

ド正論なので苦笑いしか出来なかった。

馬車を用意してくれて、待っていてくれていた、男性に挨拶すると、
相手は馬車の荷口を開けてくれる。

「オラリオに着くには1週間はかかるが、楽しくやっついていこう！さあ

馬車に乗れ！」

「あの… 本当に良いのですか？」

「当たり前だよ！何水臭せえこと言ってるんだ。お前はこの村の全員の息子だ！息子の為だと思ってる送らせてくれや！」

「最後までいい、俺たちを頼れよな！」

「そうだよ！ユージオ！冒険者になっても無茶ささないでね！」

「あのっ！モンスターから助けてありがとう！これ良かった移動中に食べてください。採れたての野菜から作ったサンドイッチです！」

「みんなっ… ありがとう！」

村の出口には続々と村人たちが集まり、

僕の旅立ちを祝ってくれる。

「みんなっ！ありがとう…！… 立派な冒険者になってくるね！」

レルバは御者席に乗り込み、

ユージオも追いかけるように荷台へと乗る。

「それじゃ… 皆っ！行ってきます！」

「「「いってらっしやーい!!」」」

村人たちからの送り出しに手を振りながら、

ユージオのオラリオへの旅立ちが始まった。

そして移動中に昼寝をしていると…

『主よ、今から行く場所は？』

「ああ、迷宮都市オラリオに行くよ。」

『そこは… 面白いか？』

ユージオはそれに対して勿論と言わんばかりに、

「ああ… 面白い所だよ!!」

最高の笑顔で返事を返した。

しかし、現実はその甘くなかったことを後で知るようになる。

「着いたぞー！ここが迷宮都市だ！」

「… 流石オラリオ…。村より全然広い…。」

最初に驚いたことは、やっぱり街の大きさだった。

僕が住んでいた村より大きさも人の多さも比較にならない
やっぱり、僕はここオラリオでっ！

「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？」

『何… 言ってるの？』

ここまでご覧頂きありがとうございます！

駄文ですみません。

次回からは第2章に突入します。

少しだけ原作より、強くなっています。

ステイタスは次回書きたいと思います。

2章 氷の冒険者

4話 ファミリア 入団

投稿遅れてすみません。

次は早めに投稿します。

駄文です。それでも良いならご覧下さい。

今回から第2章です！

今回も誤字やおかしな点がありましたら、
ご指摘下さい。

それではどうぞ！

第2章 氷の冒険者

4話 ファミリア入団

ダンジョンに出会いを求めるのは、
間違っているだろうか？

おじいちゃんに数々の英雄譚を語られて、

そして、僕は冒険者に憧れた。

数多あまたの階層に別れる無限の迷宮。

凶悪で脅威のモンスター達。

手に持つ剣一本でのし上がりに、

モンスターに襲われる美少女と出会い、

間一髪の所で飛び込み、格好良く助けて、

モンスターは倒れ、

残るは地面に座り込む美少女と僕。

赤く染まっっていく頬。

僕の姿を映す綺麗な金色の瞳。

芽吹く淡い恋心。

可愛い女の子と仲良くしたい。

時には、異種族の女性と交流したい。

そんな願いを持ちながら、
ユー・ジオは、ここ「迷宮都市」^{オラリオ}に来た。

「よし！まずはおじいちゃんと言っていたファミリアに入団しよう！」

しかし、現実はその甘くなかった。

「お前みたいなガリガリなやつが俺たちのファミリアに入ったら恥になるわ！とつとと鍛え直してこい！」

確かに否定は出来ない……。

「おおっ！……中々素晴らしい顔立ちをしている顔だな。 どう？冒険者よりもつと稼げる仕事をしないか？」

いや行くわけなでしよ!?と思いつながら逃走した。

唯一親切にしてくれたファミリアも……

「すまないっ……！俺のファミリアではこれ以上団員を養えないきれんのだっ!!」

貧乏だった……。

三、四件目の「ファミリア」に門前払いを受けた辺りから僕を尾行する者が居た。悪意を感じられなかったので、無視していた。

「はあああ……」

噴水の近くのベンチに座り込むため息をした。

「やっぱり見た目と体つきかな？大手ファミリアも中小ファミリアもどこもダメだった……。タケミカヅチ・ファミリアは親切に接してくれたから納得できたけどなあ……。」

青空を見上げて呟いた。

「…… どうしよう。この前冒険者になれないかも……」

最悪の場合を考えていたら話かけてくれた女性がいた。

「ねえ……？君っ！ちよつと良いかい？」

「はい？なんでしようか？」

突然声を掛けられも冷静に対応した。

「僕のファミリアに来ないかい？」

「いいんですか？こんな僕でも？」

「もちろんさっ！僕は君を歓迎するよ！」

僕は嬉しかった。

どこにもこんなことを言ってくれるファミリアなんてなかったからだ。

「っ……！よろしくお願いします！」

「うん！よろしく！」

「自己紹介がまだだったねっ！僕の名前はヘステイア！こう見えても神様さ！」

「僕はフローズ・ユージオです！」

あれから数分歩いて、とある書店に入っていく。

店内には老齡のヒューマンがいて、

ヘステイア様は二階の書庫を借りるといって、

老人はコクツと頷いた。

どうやら……、ここの店主とは顔馴染のようだ。

書庫に入ると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「僕は、初めて恩恵を刻む場所は、始めからここと決めていたのさ。」

「ささっ！上着を脱いでくれよっ！」

「は……はい。分かりました！」

僕は上着を脱いだ。

「ほほう……。中々良い体つきだね。羨ましい……。」

なにか妙な視線を感じたユージオは言った。

「なに見てるんですか！早く済ませてくださいよ！」

「分かったからっ！落ち着いてくれ！」

その後、神の恩恵ファルナを授ける儀式を行ったのだが、

儀式が終わるタイミングで

「なんじゃこりゃ——っ!!!」

書店から神様の悲鳴が響いた。

「うるさいわっ!!」

店主の怒鳴り声に僕達は、

「ごめんなさい!!!」

謝罪した。

「なんて読むんですか?」

「あっ……待ってね!今神聖文字を共通語にするね!」
ヒエログリフ コイローネ

フローズ・ユージオ

L V I

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏速 : I 0

魔力 : I 0

《魔法》

オールアイス
【全氷魔法】

- ・全ての氷属性の魔法が使える。
- ・ 魔物に対して威力が跳ね上がる。
- ・ 無詠唱で使用可能（1部は詠唱必須）

《スキル》

【青薔薇の誓い】

- ・ 青薔薇の剣がデランダル【不滅の剣】になる。
- ・ 氷属性の魔法（付与魔法）エンチャント可
（それ以外の属性のエンチャント不可）

マルチウェポン
【多才の武器】

- ・ 自由自在に武器の姿を変形させることができる。

(しかし、武器の大きさの上限は自身の身長まで)

【ソードスキル】

・アインクラッド流剣術が使える。

(熟練度によるスキル追加で増える)

「神様……？これってどうなんですか？」

「ハッキリ言っただけは異常だよっ！なんだい？この青薔薇の誓いで……見た事がないんだけど。あとソードスキルってなに？」

そのスキルに関してはユージオも理解していた。

「多分、この剣が原因なんだと思います。」

そう言うと、ユージオは剣を脱いた。

「確かにその剣に原因がありそうだね……」

そうへスティアは言うため息をつき、こう言った。

「ユージオ君……このスキルのことは内密にしていってくれ。」

「どうしてですか？」

「僕達神は娯楽に飢えているんだ。そんな神達が君のスキルを知ったらどうなるか分かってるよね？」

「………確かに。」

「僕は初めての眷属ことどもを奪われるのは嫌なんだっ！」

「分かりました神様。できるだけ秘密にしておきます。」

「よし！じゃあ君は行く場所があるだろ？」

「はいっ！ギルドに行って冒険者登録をしてきます！」

「うん！僕もこれからバイトがあるから、7時に噴水集合して、僕の家
に案内するよ！」

「はいっ！」

そう言っ僕はギルドに走り出した。

ここまで見て下さりありがとうございます！

ユージオ君のソードスキルに関してなんですが、

《バルティオ流》って出した方がいいですかね？

次回は早めに投稿します。

5話 初めてのギルド

すみません。ダンジョンまで書けませんでした。

次回ダンジョンに入ります。

駄文です。それでも良いならご覧下さい。

今回も誤字やおかしな点がありましたら、

ご指摘下さい。編集します。

第2章 氷の冒険者

5話 初めてのギルド

僕は今、迷宮都市の北西にあるギルドと言われている場所に来ています。ギルドに到着し中に入ると、長い受付カウンターがあり、そこにいる窓口受付嬢が冒険者の対応に追われる光景が目に入った。

僕は並んでいる最後尾に行き、

しばらく経つと、自分の番が回ってきた。

「いらっしやいませ、本日はどのようなご要件でこられたのですか？」

そこにはセミロングのブラウンの髪に眼鏡を掛け、ほっそりと尖った耳と淡いエメラルドの瞳を持った、恐らくエルフであろう、とても美人な人だった。

「僕は、冒険者登録をしに来ました。」

「君が？……冒険者？」

受付の人は僕のことじっと見つめてくる。

「……大丈夫？君って若いと思うけど……冒険者は単純な仕事じゃないんだよ？命を落とす危険性も充分にありえるの……Lvが1のままやめる人も大勢いるのよ？それでも君は冒険者になりたいの？」

「はいっ！師匠から沢山剣術を教えて貰っているので試して見たいのです！後魔法も使ってみたいです！」

「ええっ!?君っ……魔法使えるの!?!」

「使ったことはありませんが……一様使えると思いますか……」

「まあそれは後程聞くとして、冒険者になりたいならこの紙にそれぞれ記入事項があるから書いてね。」

僕は手渡された紙に自分の名前や年齢、種族、レベル、そして所属している「ファミリア」をそれぞれ記入し、受付の人に返した。

「ありがとね。なるほど、名前はフローズ・ユージオ君で、14歳のヒューマンで、レベルは1!?レベル1で魔法発現してるんだね…。所属しているファミリアがヘステイア・ファミリア?初めて聞くファミリアだね…。」

「そうですね、僕が初めての眷属かぞくですから」

「ふーん…。成程、新規のファミリアなんだ…。」

そんなことを呟いた彼女は最初よりも凄く心配そうなので僕のことを見ながら、記入漏れがないか確認してサインをする。

「只今を持って、種族ヒューマン、フローズ・ユージオを迷宮都市オラリオの冒険者として認めます。よろしいでしょうか?」

「はいっ!よろしくお願いします!」

「それではユージオ君かな?今後は私、エイナ・チュールが君のアドバイザーとして担当するようになるんだけど良いかな?」

「全然大丈夫です!こんな僕ですがよろしくお願いします!!」

「よしっ!これからよろしくねユージオ君」

なにかに気合いを込めたエイナさんは僕にこう言った。

「それじゃ…。ユージオ君…。あそこの部屋で沢山ダンジョンのモンスターのこと教えてあげるね?」

エイナさんはそういうと僕の手を取って、

ギルドが管理している個室に案内して、

部屋の扉がキイイと開きがチャリと部屋の鍵が閉められた。

……………何故に?」

……えっ？僕になにをする気なんだろう？
……なにその沢山ある分厚い本？沢山のペンとノート？

この後エイナさんと頭がおかしくなる程沢山勉強した。

そうして僕の冒険者になった最初の1日は終わりを迎えた。
何故に最初が勉強なんだよ——。

それからスパルタだった。

「なんでモンスターのこと全然知らないの!?!馬鹿なの?そんなんで冒険者続けられるの?」

とか心に刺さる発言、

「この問題をどうして間違えるの?はい!このテストで90点採れるまで今日は帰れません!沢山勉強しようね!」

とか中々鬼畜なことを笑顔で発言したりなど、

「誰か助けて……」

このようなことがあと1週間続くなんて考えもしなかっただろう。

そしてそんなことが今日あったユージオは

神様と帰宅していた。

最初は、神様はどんな所に住んでいるのだろうか？

と好奇心が溢れかえっていた。

だが、それを見た瞬間一気にそれが冷えた。

「ここが僕のホームだよっ!」

…そこには崩れかけている廃教会があった。

…いやこれ大丈夫なのか?と思うほどだ。

神を崇めるために築られたその建物は崩れかけており、
今にも全体が崩れそうであった。

正面玄関に入ってみると、
全身半分の女神像2体が私たちを万遍の笑みで迎えてくれた。
まあ、顔が半分ない状態だね。

廃教会と呼ばれてもおかしくない教会内に入り祭壇近くにある小
部屋に神様と僕は足を進めた。そこから地下へと続く階段があり、そ
こを下っていくと、ドアがあった。それを開けるとそこには一階の廃
墟とはまったき似つかない生活感のある小部屋があった。

「ここが僕達のホームなんですネ！最初は心配でしたけどここなら生
活出来そうです！」

「そうだろうね！なんせこの僕が住んでいる場所だからねっ！」
何言ってるんだろう…。この神様。

どこがなんだろう。僕は掃除をした前提で言ったんだけどなく。
この後、大掃除をした後に、予習をして、寝た。

それから、一週間ギルドに通って、
やっとダンジョンに入れる許可が降りた。

「ユー・ジオ君？生きて帰ってきてね？」

「はいっ！行ってきます!!」

僕は今度こそダンジョンに潜るようにバベルの塔へ足を運んだ。
朝方にはエイナさんに心配されたが、それでもダンジョンに行きたい
と言ったら、了承された。

「ここから」最強冒険者、そして最強ファミリア”ヘステイア・ファ
ミリア”の団長ローズ・ユー・ジオの物語が始まった。

「ここまでご覧頂きありがとうございます！」

次回はあいつと交戦します。

6話 猛牛遭遇

今回も駄文です……。文才が欲しい。
今回から原作通りにストーリーが進んで行きます。
多少オ리지ナル要素が入ります。
今回も誤字やおかしな点がありましたら、
ご指摘下さい。編集します。
それではどうぞ！

第2章 氷の冒険者

6話 猛牛遭遇

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

結論から言って僕は間違っていた。

「ヴオオオオオオオオオオオオ!!」

「えっ……。キモい……」

今現在僕は牛頭人体のモンスター☒ ミノタウロス☒に追いかけて
られている。

こうなる数時間前……

あれから半月が経った。

今では5階層まで進出許可を得ている。

今現在、ユージオは5階層でコボルトの群れと戦闘中だった。

「グルルル」

「グルルルル」

「グルルルルル」

三体のコボルトは僕を見ていた。

「よしっ！行きますかー！」

そして僕は地面を蹴った。

「グオオオオっ」

最初の一体は長剣で頭部をぶった切り、灰になった。

次にソードスキルを使い…

「レイジスパイクっ！」

突進と共にペールブルーの閃光と共に

片手の剣で突きを繰り出し、灰になった。

「グルルルっ…！」

「君で最後だっ！」

次の瞬間コボルトを蹴り飛ばし、

後方の壁にめり込み、灰になった。

「魔石だ！換金して貰おう！」

魔石を集めた後、ユージオは偶然にも下の階層に続く階段を見つけ
てしまった。

「6階層なら大丈夫だよね？行ってみよう！」

6階層に着いたが、未だにモンスターと遭遇しないことに違和感を
持ちながらも進んでいくと…

視界にモンスターが映りこんだ。

それは頭牛人体モンスター☒ミノタウロス ☒だった。

この階層には居ないはずのモンスターがそこにいたのだ。

それを見て最初に放った言葉が…

「えっ…キモい…！」

あまりのキモさに唾然していたが…

「ヴオオオオオオオオオオオ!!」

「最悪だ——っ!!」

それから追いかけて、行き止まりに追い詰められた。

「あっ死んだな…これは」

死を確信した僕だったが、神様「ヘステイア」の顔が浮かんだ。あ
の人は僕が死んだらまた孤独になるのだろうか。

それはいけない！あの人を見捨てたりはしない！
そう思いながら剣を抜きミノタウロスに向かって行った。

「レイジスパイクっ!!」

突進して剣でミノタウロスの巨大な体を突きまくっていたが、全然僕の攻撃は効いていなかった。

「ヴヴウムウン!!」

ミノタウロスの蹴りに僕は吹き飛んだ。

「痛い… 痛すぎる…」

『主よこのままだと死ぬぞ？それでも立ち上がるのか？』

それでも僕はっ！誰もが憧れる英雄になりたい！

『ふっははは、面白い。面白いぞ主よ。我がの力を少し貸してあげるぞ。思う存分暴れて来いっ！』

「はいっ！っ…!!?」

痛みに耐えながらも地面を蹴り、前進し、ソードスキルを発動させた。

「ヴォーパル・ストライクっ!」

強力な剣の突きにミノタウロスの右腕が吹き飛んだ。

「ヴオオオオオオオオオオオオ!!!」

「っつ…!!?」

ミノタウロスは痛み狂って、少年を思いつきり殴った。

「ガハッっ…!!?」

後方の壁にぶつかり、そして恐怖という感情を知った。

「ヴヴオオオオオオオオオオ!!!」

「ヒッ…!!… 来るなっ!」

ああ、死んだなど、牛の餌だなど末路を考えていたら、

「ヴオオオン?」

「へっ?」

ミノタウロスね体に亀裂が入り、そこから居なくなった。

牛の代わりに現れたのは女神と見間違えるような少女だった。蒼^{あお}

の軽装に包まれた細身の体。鎧から伸びるしなやかな肢体は眩しいくらいに美しい金眼金髪的女戦士。Lv1の駆け出し冒険者の僕でも知っている☒ロキ・ファミリア☒Lv5の第1級冒険者のヒューマン。【剣姫^{けんき}】のアイズ・ヴァレンシュタインだった。

「あの……… 大丈夫、ですか？」

大丈夫じゃない。

二つの意味で大丈夫じゃない。

今にも爆破して砕けてしまいそうなこの僕の心臓が、大丈夫なわけがないし、僕の身体の怪我也大丈夫じゃない。

「はい、これ回復薬。」

綺麗な手から差し出される回復薬を飲んで直ぐに走り去った。

僕はこの時に心を奪われた。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

再結論を言います。

僕は、間違っってなんていなかったんだ!!

「エイナさああああああんっ！」

「ん？どうしたんだの？ユージオ君？」

ダンジョンを運営する☒ギルド☒の受付嬢、エイナ・チュールは片手に持った本から顔を上げた。

多くの冒険者達がダンジョンにもぐっている昼下がりに、受付役として暇を持て余していたエイナは、自分の名前を呼ぶ声の主を直ぐに察した。

(今日も無事だったんだ……よかった……。)

つい最近冒険者登録をしたのにも関わらず、驚くべきスピードで成長し続けている少年がいる。少年の安否を確認して頬を緩ませた。眼鏡をかけ直した後、声を方向に振り向いて見ると、「エイナさああああんっ!」

全身がドス黒い血色に染まった少年の姿が飛び込んできた。

「えっえええええええええええ!?!」

「アイズ・ヴァレンシユタインさんの情報を教えて下さいっ!」

「ユージオ君、君はねえ... 返り血浴びたんならシャワーくらい浴びて来なさいよ。」

「すみませんでした...」

僕はエイナさんの言葉を聞いた後に謝罪した。

体を洗ってさっぱりした後、ギルド本部にある小さな一室で僕とエイナさんは会話をしている。

「あんな生臭い格好のまま、ダンジョンからここまで来るなんて君の神経どうかしてるの?」

「すみませんでした。」

本日2回目の謝罪の後、エイナさんから注意された。

「それで?アイズ・ヴァレンシユタインの情報だったっけ?どうして知りたいの?」

「えっと、ですね...」

僕は先程あった1部始終を語った。

普段通っていた5階層からたまたま6階層へと続く階段を見つけ、好奇心に負け、降りた所ミノタウロスに遭遇して追いかけて回された後に、剣姫アイズ・ヴァレンシユタインさんに助けられた後に、余

りの恥ずかしさに全力で逃げたことを。

それを聞いていたエイナさんは、途中から顔が険しくなっていた。「だからっ！どうして君は守らないの!?ただでさえソロでダンジョンに潜ってるんだから、不本意に下層に行ったら行けないの!なんで言うこと効かないの!?!」

「は、はいい……ごめんなさい!」

冒険者は冒険をしてはいけない。

文字だけ見ると矛盾しているように見えるけど、

つまり、安全第一にと言う意味だ。

「はあ……君は何だかダンジョンに願っている見たいだけど、それが原因なんじゃないのかな?」

「あつ、あははは……」

大正解。英雄になりたいと願いながら、異性との出会いを求めて、ちよつと冒険してみたくまりました……なんて馬鹿正直に言えるわけないでしょ!?!直ぐに個室行きだよ!?!

でも今日からは違う。

僕はあの人に追いつくんだ!

「あつ!それでアイズ・ヴァレンシユタインさんの情報だったっけ?」「はいっ!」

「うくん……、ギルドとしては他の冒険者の情報を漏らすことはご法度なんだけど、教えてられるのは公然になっていることぐらいだよ?」

それからエイナさんは語り始めた。

なんと、たった一人でLv5相当のモンスターの大量を一人で殲滅したらしい。

☒剣姫☒の渾名を持ちながら、☒戦姫☒と呼ばれている第一級冒険者。

神達の間でも名前は知れ渡っており、1人の神が『アイズたんまじ無双』とまで称賛しているらしい。

「あとは噂だろうね、あの容姿であの強さだから話が尽きないのよ

ね…。」

「あのですね、冒険者としてじゃなくて… 趣味とか教えて下さい！」
「ははくん、さてはユー・ジオ君もアイズ・ヴァレンシユタインさんのことを好きになっちゃったかな？」

「いえ、決してそういうのではなく、憧れる人です。」

「なるほどね、目標ってことだね。」

「はい！」

「趣味とかは知らないけど… 駄目だよ！これ以上は職務に係ないし！恋愛相談は受け付けておりません！」

「だから、そういうのじゃな——い！」

「まあ、この話は置いて、君は冒険者になったばかりなんだからもつと気にしないといけないことがあるんだよ？」

「それは… そうなんだけど…」

確かになりたての冒険者がヴァレンシユタインさんのことを熱心に考える暇なんてないだろう。

「君はロキ様以外から恩恵を授かったんでしよう？ロキ・ファミリアでしかも、幹部をしているヴァレンシユタイン氏にお近付きになるのは、難しいと思うな。」

「その通りですね…」

若干へこんでいる僕に困ったのか、エイナさんはギルド職員としての対応をとった。

「換金はしていくのかな？」

「はい。ミノタウロスに出くわすまではモンスターを倒していたんで、魔石はあります。」

「じゃあ、換金所まで行こう？私も行くからね？」

気を使わせてしまったのが心苦しかった。

それから、換金した後にエイナさんが話掛けてくれた。

「… ユー・ジオ君？」

「はい、なんででしょうか？」

帰ろうとした所を、エイナに引き止められる。

「あのね、女性はやっぱり強くて頼りがいのある男の人に魅力を感じるからね……諦めずに頑張っていれば、その……ね？強くなったユージオ君に振り向いてくれるかもよ？」

エイナさんは一人の知人として励ましてくれた。

それに気が付いた僕は……

「エイナさん、大好きく!!」

「……えっ!？」

「ありがとうございます!」

「えっ……!?!……ちよつと!?!どういうことなの!?!」

顔が真っ赤になったエイナさんを確認した後、

僕は笑いながら自分のホームに走っていった。

今回もここまでご覧いただきありがとうございます。

次回はステイタスのことを書こうと思います。

次回の更新も早めに行いたいと思います。

UAが4000とお気に入りが入りが50を突破しました。

ありがとうございます!

これからも頑張っていきたいと思います。

7話 レアスキル

今日は2話投稿します。(昨日の分)

今回も誤字やおかしな点がありましたら、ご指摘下さい。編集します。

第2章 氷の冒険者

7話 レアスキル

細い裏道を通り、いつもの角を曲がる。先程まで聞こえていたざわめきが途絶えた頃、僕は路地裏にたどり着いた。

「やっぱりこれ… どうにかならないかな？」

目の前には建物があった。

人気がない路地裏深くに建っている廃教会は、僕の家だ。

僕達のファミリアは貧乏なのでここに住んでいる。

僕はそんなことを思いながら慣れた足取りで突っ切り、祭壇の先にある小部屋に入り、その一番奥にある本棚の裏には地下へと続く階段があった。

余り深さのない階段を降りた後は、目の前には扉がありそれを開け切った。

「ただいま帰りました！神様！」

声を張り上げて踏み入れると、広がるのは地下室とはなんだろうという疑問を持つほどの生活感が凄い小部屋だった。まあ… 僕が全力で掃除する前までは、普通の地下室だったけどね。お陰で住める環境になったよ。

「やあ！ユージオ君お帰りー。今日はいつもより早かったね？」

「ちよつとダンジョンで死にかけました…」

「… 大丈夫？君なれたら僕はかなりシヨックだよ。本当に悲しんでしまうかもしれない。」

神様の手が僕に触れ、体に怪我がないか確かめてくる。その気遣いと優しさに僕は嬉しくなった。

「大丈夫ですよ。神様を一人にはしません。」

「本当かい？ありがとうっ！」

「はい！」

何気ない会話をしながら僕達は部屋の奥に進んでいった。

「それじゃあ、今日の稼ぎには期待できないかな？」

「いつもよりは少ないです。すみません…。」

「問題ないよ！ユーージオ君。それよりこれを見るんだ！」

「こっ、これはっ!!」

「僕のお店の売上に貢献したということ、大量のじゃが丸くんをもらったんだ！今日の夕食はじゃが丸くんだ！」

「神様！流石です！」

僕の神様は明日を生きていくために人間のお店で普通にバイトわをしている。

「それにしても… 僕の【ファミリア】に入りたいというひとは今日も相変わらず居なかったよ… 僕の名前が無名だから…」

「おかしいな… どの【ファミリア】も授かる恩恵は同じなんですけどね…」

「僕はユーージオ君一人に負担を掛けるのは、心苦しいんだ…」

「そう言っ… 神様だって働いてくれているじゃないですか！」

「それは… ごめんね。こんなヘツポコな神と契約させちゃって…」

「そんなことないですよ！僕達の【ファミリア】は始まったばかりです！要するに発展途上ってやつですよ。最初は苦しいかもしれませんが… それでもそれを乗り切ったら生活は楽になるはずです！団員だって余裕さえできれば加入してくれる日ともでてきますっつて！」

「ゆっ、ユーージオ君…」

僕が言った言葉に神様は感動したのか、僕のことを感動の眼差しで見てる。しかし、これは先程のエイナさんの話のことだ… 心が痛い。それでも僕は神様に喜んで欲しかった。だってこんな僕を認めてくれた人だから。

「ぼっ、僕は君みたいな子に出会えて幸せだよ。それじゃあ、ユーージオくん僕たちの未来のために【ステイタス】を更新しようか！」

「はいっ！神様。」

「じゃあ……いつものように服を脱いで僕にその綺麗な肌を見せておくれよ……」

「なっ!?何言ってるんですか！変態神様！」

「なっ！誰が変態だー?」

そのような会話をしながら僕はインナーを脱いだ。

そして僕の背中にびっしりと刻まれた黒の文字群があった。これが神の恩恵だ。

「グへへ……寝た寝た」

「真面目に変なことしないで下さい……ね?」

「分かってるよ！そう言えばさつき死にかけとか言ってたけど、何があつたんだい?」

「ちよつと長くなるんですが……」

僕が話している間に僕の背中を神様が変な目で見ながら撫でている。

「出会いを求めて下の階層?君はダンジョンに夢を抱いてるなあ、まづあんな物騒な所に君が求めているような女性がいるわけないだろう?」

「たっ、確かに……」

確かにあんな物騒な所に綺麗な女性なんて……

「それに、アイズ・ヴァレンシユタインだっけ?そんなに美しくて強い人なら他の男がほっとかないよ。それにその子だってお気に入りか一人や二人いるに決まってる!」

「…… 確かに」

そして最後の言葉に止めを刺された。

「まあロキの【ファミアリア】に入っている時点で、ヴァレン何某とかいう女の子とは婚約できるわけがないんだけどね」
「……………」

そんなことを話していたら【ステイタス】更新は終わっていた。

「はいっ！終わりだよ！そんな女性なんて忘れてさ！すぐに転がって

いる出合いを探してみるといいよ！」

「僕のメンタルなさすぎて泣きそうだわ…。」

僕のメンタルは豆腐よりないかもしれない。

神様は準備していた用紙に「ステイタス」を書き写していた。僕は【神聖文字】^{ヒエログリフ}なんて読めないから、神様が下界で用いている【共通語】^{コイネ}に書きえてもらった。

フローズ・ユージオ

Lv1

力 : I52↓I72

耐久 : I82↓H124

器用 : I145↓H165

敏捷 : I142↓H182

魔力 : I0↓I0

長剣術 : I0↓I35

片手剣術 : 0↓I34

体術 : 0↓I24

《魔法》

【全氷魔法】^{オールアイス}

- ・ 全ての氷属性の魔法が使える。
- ・ 魔物に対して威力が跳ね上がる。
- ・ 無詠唱で使用可能（一部は詠唱必須）

《スキル》

【****】

【青薔薇の誓い】

- ・ 青薔薇の剣がデュランダル【不滅の剣】になる。
 - ・ 氷属性の魔法（付与魔法）エンチャント可
- （それ以外の属性のエンチャント不可）

【多才の武器】^{マルチウエポン}

・自由自在に武器の姿を変形させることができる。

(しかし、武器の大きさの上限は自身の身長まで)

【剣術創芸】 ソードスキル

・アインクラッド流剣術が使える。

(熟練度により使用できるスキルが増加)

これが僕はのステータス。基本アビリティは、『力』『耐久』『器用』『敏捷』『魔力』の五つあり、Iに隣接する数字は熟練度という。これは基本アビリティの能力段階と連動している。ちなみに999が上限値で、その分野の能力を使用すればそれに応じて熟練度は上昇する。しかし、アビリティ評価Sに近づくにつれ伸びは悪くなるらしい。

そして、レベル。これが一番重要だ。

これが一つあがるだけで基本アビリティ補正以上の強化が執行される。Lv1とLv2では途方もない力差が生まれる。そんなLv1の僕がLv2とカテゴリーズされているミノタウロスに大敗を喫したように。要するに、レベルが上がれば強くなるということだ。

神様はこれを「ランクアップ」と呼んでいる。

なるほど・・・『敏捷』と『耐久』の上がり具合が凄い!

ミノタウロスに殴られ蹴られたから耐久が加算^{プラス}40と追いかけて回されたから加算^{プラス}40ということかな?

へっ?熟練度上昇トータル120オーバー?

「神様・・・これ書き間違えたりはしてませんか?」

「・・・なんだい君は?僕が簡単な読み書きも出来ないとも思っているのかい?」

「いえっ!決してそういうことでは・・・」

待て待て・・・これまでの僕の半月はなんだったんだ?本当にこれはヤバ・・・ん?

なにかに気づいたユー・ジオ神様に言った。

「神様?このスキルの欄にはなにがあったんですか?なにか消したよ
うな・・・」

「んっ… ああいつもどうり空欄だよ。手元が狂っちゃってね。これ以上スキルが増えたら君は反則だよ！」

「でっ、ですよね——」

少し期待してしまつた自分が恥ずかしい…

「まあ… 僕はこれからバイト先あるから行ってくる！一人で悲しくじやが丸くんでも食べてるといいさ！」

「あっ… 行ってらっしゃい神様」

下界の子は変わりやすいんだな…

神である不変の僕とは全然違うなあ…

【憧憬一途】

リアリス・フレイゼ

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・ 懸想おもいの丈により効果向上。
- ・ 魅了チャームの無効化

有望そうな【経験値】エクセリアを取り出し、自らの手で【ステイタス】を刻んでしまったことを今更後悔した。

ヘステイアは他人の手で彼が変わってしまったことが堪らなく嫌だった。認めたくなかった。

「ちくしよ——っ!!」

その叫び声は夜のオラリオに大きく響いた。

ここまでご覧いただきありがとうございます！

次回も早めに更新しようと思います。

ソードスキルに関してですが、最初から全て使えるのは反則チートなので熟練度を追加しました。これが増えると新しいスキルが使える仕組みになります。

8話 豊嬢の女主人

文字数4000文字いつてしまった。

駄文です。それでも良いならご覧下さい。

今回も誤字やおかしな点がありましたら、

ご指摘下さい。編集します。

それではどうぞ。

第2章 氷の冒険者

8話 豊嬢の女主人

僕は真夜中、精神世界で青薔薇の剣と修行をしていた。

『主よ始めるぞ!』

毎日の始まりの合図は僕の先制攻撃から始まる。僕は魔法の詠唱を始め、中距離からの氷魔法を青薔薇の剣に放った。

「アイス・ボールっ!!」

僕の初級魔法は掃除機のように吸収されたあと青薔薇の剣は距離を一気に距離を詰めてきた。

キンキンキン!!

互いの剣が火花を出しながら、新幹線のような物凄いスピードでぶつかり合う。

「主よ中々良い剣筋じゃないか」

青薔薇の剣は焦りながらそう言った。

「それはどうもっ!!」

それを言った瞬間に剣を振るスピードが上がった。

キンキンキン!!

それは凄まじいスピードでぶつかり合った。剣が悲鳴を上げるほどだ。

「我が主よ新しいスキルを教えるぞ!」

「はいっ!!」

キンキンキン!!

『ホリゾンタル・スクエア!』

僕の剣が空間を舞った次の瞬間、青薔薇の剣が後方に飛び、剣を左脇に構えてこちらに向かってきた。僕の目の前で剣を抜き、右から斬られ左から斬られ一回転して左から斬られ右から左上へ斬られ僕の躰は銃弾をくらった兔のように倒れた。

「そんなっ… まだ足元にも及ばないなんて…」

僕は悲しんだ。あんなに修行をしたにも関わらず、足元にも及んでないからだ。

『我が主よ… 勘違いしてないか?』

「… 勘違い?」

『我がはあの時スキルを使わなかったら負けていたぞ? それを使わせる程君は、驚く程のスピードで成長している。』

『君には剣術の才能がある。我も時期抜かされる。』

「そっ… そんなことは…」

そんな会話をしていると時間が来ていた。

「今日も修行に付き合ってくれてありがとうございました。また来ますのでその時はまた新しい技を教えてください!」

『うむ、期待しているぞ』

そう言うとき真っ白な霧に包まれ意識を手放した。

「んっ…?」

【ヘスティア・ファミリア】の本拠点、教会の地下室。

地中に作られているため、朝の鳥たちのさえずりさえ届かない場所で、僕はしつかり早起きした。生まれ故郷でおじいちゃんとの朝早くからの修行を繰り返しているうちにそれが習慣となり体内時計が開発されているのだ。

(6時、ピツタリだねっ!)

一応、ソファアから立ち上がり壁掛け時計を確認する。顔を洗い、歯磨きをした後に着替えてベッドで寝ているヘスティアに言った。

「行ってきます… 神様」

「… むにやむにや、行ってらっしやい…」

寝ぼけていたのか分からないが言葉を返してくれた。ささつと速

やかに扉をあけ、足音たてずに部屋を後にした。

(神様ってどんだけ寝起きが悪いんだろう?)

そんな疑問を持ちながらダンジョンを目指していた。今日は5階層でスキルの効果と魔法の試し打ちをしに行く予定だ。

僕は朝方の人混みが少ないメインストリートを通りながら考え事をしていた。

僕はダンジョンに入り数時間で5階層に到着した。そこには猛獣のようなモンスターが沢山いた。

「まずはスキルの効果からだ。」

そういうと青薔薇の剣に意識を集中させ

「多才の武器アーチャーモードっ！」
マルチウエボン

片手に持った青薔薇の剣が白い光を放って形を変化させていく。光が消えると氷塊のような弓になっていた。

「これはっ！凄いつ！」

次に魔法を弓矢に付与して放った。

「アイス・アローっ！」

次の瞬間氷を纏った矢がコボルトにあたり、コボルトの全身が凍った。

「これが…付与魔法か…！」

初めて試したスキルと魔法に沢山の可能性を考えながら次々とモンスターを倒していった。

次は魔法にだ。先程のは付与魔法だか魔法を使ってみよう。

「動きを止めよ アイスロックっ！」

拘束用の捕縛魔法。低級の氷属性だ。

コボルトがいる地面から下半身を特殊な氷で覆い、動きを封じた。

「今だっ…！」

ズシヤツ!!

下半身が凍って動けないのを確認した後、距離を詰めて剣で切り裂く。

「魔法って色々便利だな〜」

と思いながらダンジョンを後にした。

僕は魔石の換金を済ませた後に、神様への感謝の気持ちを含めて髪留めをプレゼントしようと思い買ったあとに帰宅した。

僕はうらぶれた教会にたどり着き、中に入り地下の扉を開ける。

「神様、今帰りました！」

「おかえり！ユージオ君！」

そう言うソファアに仰向けの姿勢で本を読んでいた神様は起き上がって笑みを浮かべ、僕の前までやってきた。

「あつ！神様これプレゼントです！」

「えっ？」

差し出したのは帰る際に買ったものが内包された一つの小袋だ。神様はそれを受け取り、袋を開けて中身を確認する。

「ユージオ君？これって…」

その袋の中には薔薇をモチーフに作られたリボンに小さな水色の5本の薔薇があった。

「神様？薔薇の花言葉って知ってますか？」

「なんだい？それは…」

「薔薇は5本であなたに出会えた事の心からの喜びって意味なんですよ。僕は貴方に会えて本当に良かった！」

「ゆっ、ユージオ君！君ってやつは…」

泣きながら僕に言ってきた。

「なあ…ユージオ君…」

「どうしたんですか？神様」

「僕は君が初めての眷属で本当に良かったよ」

神様はそういうと無邪気な笑顔でこちらを向いてきた。

そんな神様に僕も…

「僕も、改めて神様に出会えて良かったです！」

ヘステイアの髪には丁寧に結んだ薔薇のリボンが結んであった。それから夕食を済ませソファーに座って氷魔法についての本を読んでいた。

(なるほど…) 僕は水属性も使えるのか…)

僕は新たな発見をしたのだ。

それは水属性の魔法が使えることだ。

(だったらアクアプロテクションとかどうだろ… 魔法から防護する水の膜を張る中級魔法か。覚えといて損はないか)

(後は攻撃魔法とかあるかな…? あっフローズ・ミントスカ… 詠唱が必要かえつと… ころかな? 霧氷に告ぐ、我が名はユージオ、凍てつく力を欲する者なり。 白い手のひら視界を覆う、零度の抱擁、両手を広げて包み込めっ! フローズンミスト!)

と頭の中で唱えたせいで発動した。

「ちよつと!? ユージオ君? 魔法発動させてどうしたの!? 寒いつて!」

濃い霧で包み対象の体温を低下させる中級魔法を唱えたせいで部屋の温度が急激に下がった。

「迂闊だった! 神様大丈夫ですか!」

「大丈夫じゃないから解除してくれ!」

数分後に解除された。

そんな感じで1日が終わりを告げた。

僕は今、神様から逃げている。

なんででしょう… 水魔法で顔を洗おうとしていたが対象を間違えて神様にしてしまって神様がずぶ濡れになって乾燥した後には神様が激怒してしまってそれで逃走している。

「あっ! 朝ごはん食べ忘れてしまった…」

ギルギル、と体の内側から聞こえてくる音に、僕は顔を真っ赤にしながら人の横を通り過ぎる。恥ずかしい…。お腹のなかに何も無い。

どうやらこの空腹をなんとかしないとダンジョンに行けないと悟ったユージオは節約していた金を使うことにした。しようがない

どこかで買って…。

「あの… すみません」

「!?」

僕は後ろを振り返った

後ろから声をかけてきたのは僕と同じヒューマンの少女だった。見た感じ明らかに一般人なのに何故か驚いてしまった。

「あの… すみませんでした。」

「いえ、こちらこそ驚かせてしまつて…」

「僕に何か用ですか？」

「あ… これ落としましたよ？」

彼女が見せてきたのは紫紺の色をした結晶だった。これは魔石だよね…? いや… 何かおかしいな? 昨日魔石を全部換金したのは確認済みだし… 言ってみるか!

「あの… これ僕のじゃないですよね?」

「えっ!? そんなことないですよ!?!」

そう尋ねると彼女はウルウルした目をして僕を見上げる。凄く可愛な… いいや、違う。嘘とわかりやす過ぎるのが怖いなあ。昔おじいちゃんに詐欺られそうに何回もあったからそれで見抜くの慣れたのかな? 流石に疑いすぎかな? そう考えていると彼女は慌てた様子になり

「ま、待つてください! 騙していたのは謝罪をしますから話を聞いてください!」

「あつ、はい。話程度なら…」

話を聞く時点で僕は甘すぎる気がするな… と思っただけど、この女の子から敵意を感じないので話を聞くことにした。

「じつ、実は私、あそこの飲食店に勤めてまして、知り合った冒険者をお得意様にしたくてですね…」

そこに勤めてるのだろう店員さんは自分が働いてる場所に指を指した。

僕はあそこがなんなのかを聞いた

「あそこはなにをしてるんですか？」

「飲食店ですよ！結構人気なんですよ？」

「そうなんですね！」

「はい、そうなんですよ！店員には可愛い子がたくさんいますよー！」「うん！聞いてない！そして帰る時に莫大な額を請求するぼったくりの店とー！」

「えっ!?ち、違いますよ!?そういうお店じゃありませんから!!」

「そうなんだ、勘違いか！良かった、流石にこんな可愛い子がそのよ
うなお店の従業員だったら僕は拗ねていただろう。」

「そう考えると先ほどやりとりしていた店員さんが僕が思っ
ていたように拗ねたようにしている。」

「はあ... 私はただ冒険者のひとに私が働くお店のご飯を召し上がっ
て頂くだけなのに... 私の心は深く傷を負いました... そんな傷を
癒せる優しい冒険者はいないのかしら...?」

「優しい人ですか？」

「そうですよっ！冒険者のなりたてで、亜麻色のふわふわの髪に緑の
瞳の人が私のお店に来て慰めてくれないかな...?」

「あからさまに僕のことですよね!?クルクルギュー」

次の瞬間、僕の空気を読まないお腹がなった。

「... お腹空いているんですか？」

「.....」

「恥ずかしいっ！穴があったら入りたい...」

「ちよつと待ってて下さいね？」

「そういつたあとお店に入っていく、数分たつと手にちんまりとした
バスケットを持ってきた。その中には小さめのパンとチーズが見え
た。」

「これ良かったらどうぞ！まだお店やってなくて賄いじゃないですけ
ど...」

「そんな！悪いですよ!?それにこれ... あなたの朝ごはんじゃ...」

「店員はぎっすきの拗ねた表情が消え、照れたように言ってきた。」

「このままあなたを見過ごしてしまうと... あなたが逃げそうなんで

すよね〜」

ギクツギクツ

「だからここで借りを作って、また今日の夜にこの店に寄ってくれませんか？さっきの仕返しです。」

「ズルい…ズルすぎる…」

困り果てた僕の返答に店員さんは少しの間目を瞑って、次に開けた時、今度は少し意地悪そうな笑みを浮かべて僕の前からさっつていった。

ここまでご覧いただきありがとうございます！

次回はあのシーンですね。はい。

早めに次回も投稿します。はい。

戦闘シーン上手にかきたい…。